
昔の思い出

霧氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔の思い出

【著者名】

Z5330Z

【作者名】

霧氷

【あらすじ】

これは、羽瀬川小鷹と、ある少年の昔話。

(前書き)

「あれ？ 」Sの「つって結構合いつかも？」とこう考へのもと作ってみました。

「うわあっ！」

羽瀬川小鷹は公園で、自分と同学年の少年達にからまれていた。原因は明白、自分の髪の毛の色だろう。彼はイギリス人の母と日本人の父を持つハーフなのだが、父親に似てしまつたせいか髪の色は金髪ではなく、黄土色がかかつたくすんだ金色になつてしまつている。そのせいで、昔から何かとからまれる事が多かつた。そして、今現在進行形で複数の少年達に襲われている。

（くそつ・・・。こんなときあいつがいてくれたら・・・）
あいつとなら、誰と戦つても負ける気がしない。しかし、あいつはもういない。少年の拳が小鷹を襲おうとしたそのとき、バキッ！

突然そんな音が鳴り響き、少年の体が吹き飛ぶ。小鷹が横を見ると、そこには自分と同い年の少年が拳を構えて立つていた。

「やめろお前ら！ 大勢で襲い掛かって恥ずかしくねーのか！！

男ならタイムだタイムだ！」

少年が叫ぶと、周りの少年達が怒りを見せ始める。

「何だコイツ！」

「やつちまえ！」

少年達が少年に襲い掛かる。それを見ていた小鷹は、少年を助けるために自ら少年達の群れに飛び込んでいく。

そして、小鷹と少年は勝つた。少年は小鷹に向き直り、ニッと笑つた。

「大丈夫か？」

小鷹は戸惑いながらも、少年に返事を返す。

「ああ、ありがとな。名前、何て言うんだ？」

小鷹が尋ねると、少年は胸を拳で一回叩き、同じ手の人差し指をビツ！と小鷹に向けた。

「俺の名前は - - - - - だ！ 俺の夢は、今いる学校の連中全員と友達になる事だ！」

一瞬小鷹はポカンとするが、やがてふつと吹き出した。

「ハハ！ 面白いなお前！」

「ん？ そうか？ はははは！」

二人はお互いに笑いあつた。

それから一人は遊び始めた。鬼ごっこに、かくれんぼに、絵描き。それは、親友と別れた小鷹にとつて、とても楽しい時間だった。そんなある日、二人がコーラを飲んでいると、小鷹が話し始めた。「なあ - - - - - 。前に、俺の友達のお母さんがそいつに言つてたらしいんだ。一年生になつたら、友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切に出来るような本当の友達を作りなさいって。たつた一人だけでもお互いの事を誰よりも大切に思える本当の友達がいれば、きっと人生は輝かしいものになるだろうって」

「へえ、良い言葉だな」

「ああ、だから、俺もお前の事を、その友達と同じくらい大切にするよ」

小鷹がそう言つと、少年は笑顔を小鷹に向けた。

「ありがとな！ じゃあ、俺もお前や他のやつらも全員百人分大切

にしてやる！」

その言葉に、小鷹は苦笑して、

「だけど、そんなにたくさんの友達なんて、覚え切れないんじゃないか？」

だが小鷹の言葉に少年は首を振つて、

「いいや！　俺は絶対に誰の事も忘れない！　そいつの事を覚えていれば、また絶対にそいつを会える！　だから、俺はたとえ友達が百人、いや千人出来ても、そいつらの事は忘れない！　そいつが俺の事を忘れていても、俺は絶対に忘れない！　そいつらの事を百人分、いや何百人分も大切にしてやる！　もちろんお前もだ、小鷹！」

少年に言い切られ、小鷹は顔が熱くなつた。そこまで言い切られると、かなり照れ臭い。それを誤魔化すため、小鷹はコーラを一気に飲み干した。

そんな彼らに、別れのときはやつてきた。小鷹が転校することになつたのだ。重い気持ちを抱えながら、いつもの公園に行くと、そこには少年が暗い顔をして立つていた。

「・・・どうしたんだ？　- - - - -。何かあつたのか？」

少年は小鷹の方を見ると、少しためらいがちに声を出した。

「・・・実は俺、転校するんだ」

「えつ・・・お前も？」

「小鷹もか？」

「ああ・・・」

一人の間に重い雰囲気が流れる。しかし、やがて小鷹が言った。

「・・・なあ・・・。また、会えるよな？」

すると、たちまち少年は笑顔を取り戻し、

「ああ！ 当たり前だ！ 僕達は友達だからな！ 僕達がお互いの事を忘れない限り、俺達はいつまでも友達だし、また会える！」

それを聞き小鷹も笑顔を取り戻す。何故か、この少年の言葉は人を元気にさせる。そして、少年と小鷹は一步お互いに近づくと、お互いの拳を数回打ち合わせる。

それは、前に少年が教えてくれた動作。

二人が友達である事を示す、『友情の証』。

「じゃあ、また会おうな！」

少年が笑顔で片手を上げ、小鷹もそれに答える。

「ああ、またな。

弦太朗

「んつ・・・」

聖クロニカ学園二年生、羽瀬川小鷹は目を覚ました。

「・・・あれ、俺なんの夢見てたんだ？」

かすかに覚えてているのは、自分が小学生の時に、誰かと友達で、一緒に遊んでいた事だけだ。しかし、誰かと遊んでいたかは分からぬ。ただ確かなのは、前に思い出した黒髪の少年とはまた違う少

年だったという事だけだ。

「・・・なんて名前だつたつけ」

小鷹は眉をひそめながら呟くが、やがて朝飯を作るために、台所へと向かつた。

今日も、羽瀬川小鷹の友達作りの一 日が始まる。

(後書き)

どうでしたか? ここの一人なら、本当にこんな会話をしてもうだと
思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5330z/>

昔の思い出

2011年12月17日23時47分発行